ナイジェリア内戦文学における女の代弁／表象

——ブチ・エメチェタの『デスティネーション・ビアフラ』研究——

大　池　真知子

Ⅰ．はじめに

本稿では、ナイジェリアの女性作家ブチ・エメチェタ（Buchi Emecheta）が書いた『デスティネーション・ビアフラ』（1982、以降『デスティネーション』）を分析し、女の代弁（リプレゼンテーション）／表象について考察する。[1] 前半で問題の背景を整理し、後半で作品分析を行う。

Ⅱ．アフリカのフェミニズムと女の代弁／表象

A．ナイジェリア内戦文学とジェンダー

表題のナイジェリア内戦はビアフラ戦争とも呼ばれ、1967年から1970年まで続いた。まずその歴史的な背景を説明しておこう。[2] 1960年、ナイジェリアはイギリスから独立する。だが統一国家として独立を果たしたものの、国内の民族対立は植民地支配の負の遺産として積み残され、独立後の権力闘争のなかでいっそう激化していく。民族間の緊張は1966年１月のクーデター、同年６月の再クーデターをつうじて頂点に達し、ついに1967年、イボ人主体の南東部がビアフラ国として独立を宣言するにいたって；ナイジェリアは内戦に突入。1970年にビアフラ軍が降伏するまで、疲弊の限りを尽くすことになる。戦争が起きたのは冷戦期ではあるが、そこで「問われたのはまさに国家（ステイト）機構の正当性である」（Turshen 3）という意味で、ナイジェリア内戦は、冷戦後にアフリカで頻発している民族紛争のさきがけとして位置づけられうるだろう。

このようにナイジェリア内戦は、アフリカ全体の社会と歴史を考えるうえで重要な意味を持ち、それゆえ文学の分野でもまた、主要なテーマの一つとして取り上げられてきた。ふりかえってみれば近代アフリカ文学は、第2次大戦の頃、それまで白人植民者によって他者として表象されてきたアフリカ人が、自己自身を表象する抵抗文学として始まった。[3] 独立後も真の民族解放が果たされたとは言いがたく、民族解放、そしてアフリカ人アイデンティティーの模索は、つねにアフリカ文学の主題でありつづけている。[4] アフリカ文学がこのように民族主義的な性質を持つこと、そして上の段落で述べたように、ナイジェリア内戦がアフリカの国家と民族の矛盾を象徴する出来事だったことを考えあわせれば、ナイジェリア内戦文学はアフリカ文学の根幹をなす重要なジャンルだということが明らかであろう。アフリカ文学の主要学術誌の編者、エルドレッド・ジョーンズ（Eldred Jones）の言葉を借りれば、「アフリカ大陸全体にとって、それ

1．「リプリゼンテーション」という言葉は、ある者に代わって語る（speak for）という「代弁」の意味と、ある者について語る（speak about）という「表象」の二つの意味を持つ。以降、本稿では、煩雑さを避けるためルビは省略する。女のリプレゼンテーションをめぐるもっとも最近の議論は、Spivakのとくに３章を参照。

2．ナイジェリアの内戦については多くの研究書が出版されている。古典的な研究書としては、Panter-Brick が関連重要資料も収録しており参考になる。大状況の政治力学よりは、本稿の考察対象である小状況の戦争体験に焦点を置いたものとしては、Harneit-Sievers, Ahazuem, and Emezue および Amadiume and An-Na'im 参照。前者は、インタビューをとおして一般人の内戦認識に迫る貴重な研究書であり、後者は、アフリカ諸地域の紛争を射程に入れて戦後社会の和解について考察している。ナイジェリア内戦についての網羅的な文献案内としては、Osuntokun（筆者未見）および Oyeweso（筆者未見）を参照。

3．初期のアフリカ文学研究についてはBishopを参照。なお、現在のアフリカ文学研究は、ヨーロッパ語で書かれた近代文学をおもな対象としており、本稿もその例外ではない。2000年にエチオピアで開催されたアフリカ文学大会では、アフリカ諸語での文学活動推進が謳われたが、実現にはかなりの困難が伴なうと予想される。しかし少なくとも最近の文学研究の傾向として、ヨーロッパ語で書かれた作品を分析する際にも、口承伝統とのかかわりを論じることが増えているように筆者は観察している。アフリカ文学における言語の問題については以下を参照。*African*, 1989; *African*, 1990; Cancel; Chinweizu, Jemie, and Madubuike; Ngugi; Owomoyela, "Question"; *Research*, 1992; *Research*, 1993; *Research*, 1997.とくにジェンダーの視点からの口承文学研究は *Research*, 1994を参照。

4．現在のところもっとも包括的な現代アフリカ文学史としてはOwomoyelaを参照。文学史という体裁は取っていないが、Moss and Valestukも主要な作品の解説を網羅しており、アフリカ文学の標準的な全体像を知るのに参考になるだろう。

[ナイジェリア内戦]は、アフリカの諸国家が新たに適応する過程で、また凄惨な植民地支配の遺産を解決しようと試みるなかで、避けては通れない産みの苦しみをともなう諸問題のひとつのパラダイムであった」(viii) し、したがって「ナイジェリア内戦は、新しい小説の一群を生み出してきた」(viii) のである。また、1982年にナイジェリア内戦関連の最初の文献目録 ("Seleceted") を作成したチディ・アムタ (Chidi Amuta) も、文献の次元で同趣旨の説明をしている。アムタによると、ナイジェリア文学のなかで内戦関連作品は点数がきわめて多く、しかもナイジェリア文学がアフリカ文学全体のなかで作品数の上からも支配的であることからすると、ナイジェリア内戦は確実にアフリカ文学の一大テーマであると言う ("Literature" 85)。

しかし問題は、アフリカ文学も他地域の文学の例に違わず、男中心であることに加え、戦争というテーマが「男性的」であることも手伝って、ナイジェリア内戦文学研究が男性作家に偏っていたことである。たとえば、ナイジェリア内戦文学論の多くが雑誌論文であるなかで、[5] 数少ないまとまった研究書を著したクレイグ・マクラキー (Craig McLuckie) は、女性作家についてまったく触れていない。また先述したアムタは、一貫してナイジェリア内戦文学を追究しているが、例えば論文の一つ「ナイジェリア戦争小説における歴史、社会、ヒロイズム」(傍点筆者) は、タイトルから明らかなようにジェンダーの視点をまったく欠いている。

もちろん女性作家による作品も存在する。しかし自伝や自伝的小品がほとんどで、本格的な文学作品といえるものは数少なく、[6] したがっていずれも評価は高くない。自伝的要素が濃い理由は、女性作家が女の視点を強調して書くとき、「女ならでは」の生活密着型を志向するからであろう。例えばアフリカ女性文学の母ともいうべきフローラ・ワパ (Flora Nwapa) は、内戦をテーマにした自伝的中篇を書いている。[7] 作品の視点は、ビアフラ地域の村に住む中産階級の女に置かれ、戦争中、前線が日に日に後退し情勢が緊迫していくなか、村の指導者たちがヒステリックなまでに村人を動員し、ついに村が陥落して避難命令が出るにいたって、指導者層の裏切りが露呈する、という身近な村の政治と銃後の生活が描かれる。いわゆるドラマ性は乏しく、フェミニスト的な視点からの批評でないかぎり、女性作家によるこれら戦争小説の評価は高くない。アムタによる別の評論では、ワパの作品についてわずかに触れ、「フェミニズムのプロパガンダにこだわ」("Nigerian" 95) ることが作品の失敗の原因になっていると断じている。

B.『デスティネーション・ビアフラ』と他者表象

このように、女性作家によるナイジェリア内戦文学のほとんどが自伝ないし自伝的な小品であるなか、表題の『デスティネーション』は、有名な女性作家が書いた唯一の本格的な文学作品だといえる。そしてこのフィクションであるという点が、『デスティネーション』の特異性であり、アフリカの女性作家がアフリカの女を代弁／表象することを問題化するのである。以下では『デスティネーション』を、作者エメチェタの作品史のなかで位置づけることによって、作品が問う女による女の代弁／表象という問題の意味を考えてみたい。

興味深いことに、エメチェタは『デスティネーション』の前書きで、この作品は自分が初期に書いた自伝的作品とならんで「書かなければならなかった作品」(vii) であるとしている。自伝というのは、いわばもっとも直接的な自己表現である。エメチェタの場合それは、一言で言うなら、黒人移民の女のルサンチマンの表現であった。具体的には、エメチェタの初期二作が自伝的な作品である。[8] 一作目では、アフリカ移民のシングルマザーがイギリス社会で経験する差別が描かれ、二作目では、一作目の主人公の過去、すなわち、彼女がナイジェリアで生まれてからイギリスで離婚するまでの事情が描かれる。『デスティネーション』の前書きで、『デスティネーション』とならんで「書かなければならなかった」とされる作品は、二作目である。そこでは、主人公の姿を借りてエメチェタの苦難の半生——幼少時代、娘だからという理由で学校に行かせてもらえず、親にないしょで奨学金を得て高校まで進学したこと、プレッシャーに負け18歳でついに退学し結婚したこと、夫と自分の渡英費用を独

5．その他、ナイジェリア内戦文学を扱った研究書としては、Ezeigbo, *Fact* を参照。筆者 Ezeigbo がフェミニスト批評家として知られるわりには、本研究書ではフェミニストの視点は明確でない。さらにナイジェリアの出版社による出版であるため流通が限られていること、内容が網羅的で、文学分析としては精緻さに欠けることなどにより、やはりこの研究書も、ナイジェリア内戦文学研究の男性中心主義を再検討するに至っていない。

6．あまり有名でない女性作家による作品としては、以下を参照。Acholonu; Meniru; Njoku; Ofoegbu; Onwubiko; Umelo.

7．ワパは内戦をテーマに短編も数篇書いている。

8．ここで挙げた初期の自伝的作品にたいし、*Head* は明確に自伝として発表されている。しかし後者は、エメチェタが作家として成功を収めた後に、これまでの苦労話を振り返って書いたもので、初期の作品とはまったく位置づけが異なる。

力で稼いだこと、イギリス社会で敗残者となっている夫に代わって、つねに家族を支えたこと、夫から避妊の協力を得られず、7年間で5人の子どもを産み育てたこと、作家にあこがれて書いた原稿を夫に燃やされ、ついに別れたことなど――が赤裸々につづられる。

初期の自伝的作品を書いてからは、エメチェタは本格的な小説を執筆するようになる。これらの小説では、舞台は植民地時代のアフリカに置かれ、植民の歴史が女の視点から表象される。そして五作目『母の喜び』(1979)は、国際的な名声を作者にもたらした。この作品は、主人公が母親業に邁進するが報われず、結局孤独に死ぬという悲劇を描いたものである。『母の喜び』が「国連女性の10年」に出版されたことも手伝って、この作品によってエメチェタは、いわば、世界の読者に向けて「家父長制の伝統に抑圧されるアフリカの女」を代弁する女性作家という地位を確立した。

そしてこの代表作の次に書かれたのが、表題の『デスティネーション』なのである。主人公はエリートの女だが、女性難民グループに混じってビアフラ地域へと避難し、その過程で主人公が難民のサバルタンの女たちとともに経験した虐殺、レイプ、飢餓が物語の中核をなしている。

以上述べてきたエメチェタの立場と作品の変化は、女が女を代弁／表象するという90年代フェミニズムの問題構制のなかで論じられる必要がある。というのも、『デスティネーション』の前書きが並置する二作品、すなわち自伝二作目と『デスティネーション』は、前者が差別される女による自己表象だとすれば、後者は、国際的に著名な作家によるサバルタンの女の他者表象だといえるからだ。このことについてさらに詳しく考察してみよう。

『デスティネーション』における困難はしたがって、端的に言うならば、知識人作家がサバルタンの女の「記憶」を「物語化」することにある。[9] 物語化は必然的にある種の暴力を伴なう。語る能力があり、出版の機会があり、あの『母の喜び』の作者の次作を待つ世界の読者が読んでくれる、という特権的な立場にある作家エメチェタが、サバルタンが経験した戦争を、サバルタンに代わって代弁／表象するのであるから。加えて、じつはエメチェタは、この戦争を実際には経験していない。『デスティネーション』の前書きでまっさきに断わっているように、彼女は戦時中ロンドンにいた。だからこそ、他の女性作家と違って自伝的作品を書きえず、実際に経験した者たちからの伝聞を物語として再構成せざるをえなかった。戦争を体験してしまうと、あまりに圧倒的な経験が物語化を拒むのであろうが、エメチェタは現場から離れていたがゆえに、物語化という暴力をふるうことが可能となった。それゆえエメチェタは、前書きにおいて、みずからが表象の暴力をふるった人たちと彼らの記憶にたいして謝辞を述べる。すなわち、多くの名前とともに例えば「[イボ人の多くが避難した] ベニンからアサバへの道を歩いて避難したときに、そこで目にした殺戮を語ってくれたこと」「ラゴス [当時の首都] でのイボ人虐殺と、ニジェール側東岸に住む隣人に [ニジェール川西岸のイボ人が] 冷遇された経験を教えてくれたこと」「私たちの村が、連邦軍とビアフラ軍両軍から身を守るため、独自の民兵を組織したのを教えてくれたこと」(vii-viii) などを列挙し、物語の素材を与えてくれたことにたいし感謝の言葉を述べるのである。これらの材料はすべて、後に続く物語に実際に組み込まれている。同時に、出版に際しての経済的な事情により、物語に組み込めなかった題材もあったことをエメチェタは告白する (vii)。このことから読者は、語っても聞いてもらえなかった語り手の存在を知る。

以上、前書きで言及されているのは、生きのびた者たちから伝え聞いた戦争の記憶であるが、さらに重要なのは、『デスティネーション』が死者に捧げられているということである。献辞を引用する。

> この作品をこの戦争で死んだ多くの親類と友人の記憶に捧げる。とくに、飢え死にした8歳の姪、ブチ・エメチェタの記憶に。そしてイブザ [エメチェタの故郷の村] のCMS難民センターで、同じくビアフラの病で2日後に死んだその4歳の妹、ディディ・エメチェタの記憶に。またある夜、イブザへ向かう途中連邦軍に爆撃され、逃げこんだ先の森で蛇にかまれて死んだおば、オジリ・エメチェタと、母方のおじ、オコリー・オクウェクウの記憶に捧げる。
>
> また『デスティネーション・ビアフラ』を、ンクポトゥ・ウクペの森で生きながらにして焼き殺されたあのイブザの女たちとその子どもたちの記憶に捧げる。(vi)

献辞の筆頭に上がっているのは、エメチェタと同姓同名の姪である。少女はいわば、作家エメチェタの代わりに死んだ。そしてエメチェタは少女の代わりに生きのびた。すなわち『デスティネーション』は、けっして語ることができない死者の記憶に負っているのである。

9. 本稿において「記憶」と「物語」を考察するにあたって、岡の『記憶』から多くの示唆を受けた。

事後的に、そして外部から、すなわち時間、空間ともに隔たった立場から、語りなおす。隔たっているからこそ語りうる自分が、語りうるという責任において、語りえない者、死んでいった者の記憶を語りなおす——献辞と前書きで明らかにされるのはまさにこのことだ。しかし当然、外部の者が代弁／表象する物語は、内部の者が経験した出来事の記憶とは食い違う。記憶が物語化されたときなにが失われるのだろうか。そこに働く表象の暴力とはいかなるものか。その暴力なしには、つまり物語化されずには、われわれは死者の記憶を共有できないのだとすれば、文学とはいったいなんだろう。象徴的なことに、主人公が難民の女たちとの経験をもとに、『デスティネーション・ビアフラ』という物語を書こうとするところで、『デスティネーション』は終わる。『デスティネーション』はしたがって、つねに未完の物語として、表象のアポリアそのものを演じていることになるのだろうか。

このように『デスティネーション』が、表象のぎりぎりの不可能性を指し示すのだとすれば、その主人公がエリートであるのは必然ともいえる。物語は、エリートである主人公が、近代国家において「アフリカの女」をいかに位置づけ、書き記すか、そしてそのとき、彼女とサバルタンの女はいかなる関係を構築するのかを明らかにしていく。物語は大きく二部に分かれている。第一部は男性作家による戦争小説にかぎりなく近く、汚い政治ゲームの描写が中心となる。主人公デビーは、最初は兵士として、次にはビアフラ側指導者に和平を説く隠密の使者として、男たちの政治闘争に参加する。第二部は、デビーが上述の使命のもと、ビアフラへ向かう旅が描かれる。ビアフラへ行く途上でデビーが難民の女たちと経験した戦争の暗部の描写が、小説全体の見せ場となっている。物語の最後、ようやく終戦となり、指導者は人々を見捨ててビアフラを脱出。デビーは指導者たちにむかって「私は女、アフリカの女。私はナイジェリアの娘」(258)と宣言し、戦後、ナイジェリア再建のために尽くすことを決意して物語は幕を閉じる。

このように『デスティネーション』は、主人公がサバルタンの女たちとの経験を通じて「アフリカの女」という主体位置を模索する軌跡を描く。民族紛争という危機に、対立するそれぞれの権力主体は国家主義、民族主義の言説を動員して、国家と民族の境界線のなかに人々を囲いこみ、その境界線をみずからの利益に応じて引きなおそうとする。このとき女はいかに国家、民族の境界と関わるのか。同時に女というアイデンティティー領域に階級はいかに交差するのか。紛争時において、国家主義、民族主義の言説は戦闘化され、もっとも男性中心主義的になるが、[10] その言説に主人公はときに寄り添い、ときに抑圧されながら、民族とジェンダーの座標軸を交差させ、アフリカの女という主体位置を定位する。だがそのときの「アフリカの女」は、けっして一枚岩ではない。主体として自己を定位しうる女は、サバルタンの女に、そのアイデンティフィケーション機構を質され、サバルタンの女からの問いかけ——おまえが主体と定める「アフリカの女」とはなにか、そこに私はいるのか——にたいし応答責任(レスポンシビリティー)を負っている。

ここで一つ留意点がある。アフリカ人／ナイジェリア人／イボ人という広い意味での民族の次元でのアイデンティフィケーション作用を、筆者は否定的にはとらえないという点である。日本には、民族主義が近隣諸国にたいする侵略戦争を支えたという歴史があり、フェミニストのあいだでは、男中心の民族主義にたいする忌避がきわめて強い。[11] だがそれは、ときに民族主義を「本質的」に忌避し、その結果、民族主義を非歴史化することになりはしないか。しかし、自民族中心主義、侵略、膨張主義に陥らずして民族アイデンティティーを規定するための言説は、構築可能であると筆者は考える。というのも、アフリカ研究の立場からすると、アフリカ人は女であろうと男であろうと、アフリカ人というアイデンティフィケーションを無視しては、自己を位置づけえないからだ。ヨーロッパはアフリカを他者として規定し、抑圧してきた。アフリカ人が自己を再定義する過程は、それゆえ、植民地帝国主義という近代の膨張国家主義言説を転覆する過程でもある。だが、植民地帝国主義に対抗するアフリカの民族自決の言説は、アフリカの女を他者化し、民族、伝統、神話の比喩の役割を女に担わせてきたということは、フェミニストたちによってすでに暴かれている。[12] このためアフリカの女は、男中心の民族自決主義を脱構築しつつ、しかし同時に、ヨーロッパの植民地帝

10．軍国主義と男性中心主義の関係については、Reardonを参照。また、冷戦期以降の国際政治と紛争をジェンダーの視点から分析したのもとしては、Enloeを参照。

11．例えば「慰安婦」をめぐるフェミニストの議論においては、ジェンダー分析を優位に置く上野にたいし、朝鮮、韓国の立場に立つ金、第三世界フェミニズムを専門とする岡から、日本の主流派フェミニストはみずからの民族位置の抑圧性を隠蔽しているのではないかとの批判がなされている。日本の戦争責任資料センターが主催したシンポジウムの記録を参照。

12．アフリカ文学における男性作家による女性表象研究は、ほとんどすべて、この議論をしている。なかでも明解な議論としては、Strattonを参照。

国主義に対抗して、アフリカ人としてのアイデンティティーを模索する必要がある。アフリカの女の課題は、民族の言説を超えることでなく、これまで男の立場で語られてきた民族の言説を語りなおすことなのである。

C．アフリカのフェミニズム

このことを少し丁寧に、文学研究の立場から、アフリカのフェミニズムの歴史をひもといて説明しておこう。[13] 男中心のアフリカ文学をジェンダーの視点から修正する動きは、1980年代に本格化した。フェミニスト批評家は、その思想基盤として西洋のフェミニズムを利用しながら、西洋からの輸入物であるフェミニズム思想をいかにアフリカ化するかを問うた。例えばキャロル・ボイス・デイヴィス（Carole Boyce Davies）は、アフリカのフェミニズムは、アフリカの民族自決の言説とヨーロッパのフェミニズム言説の「両方に忠実であろうとするため、そこにはある種の緊張が生じ」(1) ると論じる。すなわち1980年代においては、フェミニズム思想は白人ヨーロッパ起源の思想ととらえられていたのである。

それにたいし1990年代になると、アフリカのフェミニストたちは、アフリカの伝統に独自のフェミニズム思想を再発見する。例えば1992年にナイジェリアで開催された黒人女性会議において、ガーナ人作家のアマ・アタ・エドゥ（Ama Ata Aidoo）は次のように述べる。

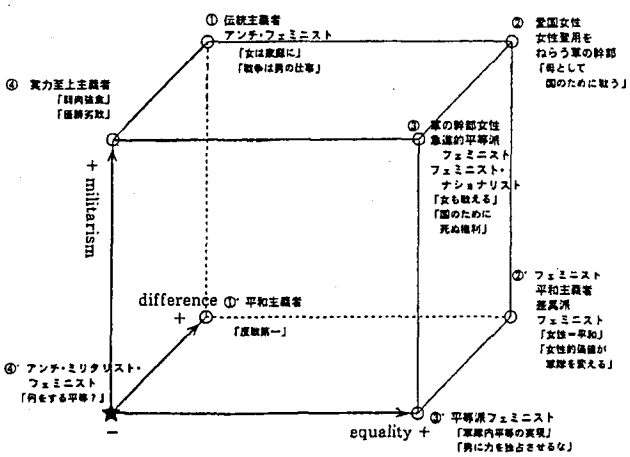
> 彼女ら［喜望峰からカイロまでの今日の大多数のアフリカの女］はアフリカ大陸の農村地帯と都市スラムに住む。最低限の教育しか受けていないか、あるいはまったく教育を受けていない。一夫一妻制ないしは一夫多妻制のもと結婚している。２人から6人の子どもがいる。小規模農業や小規模商業を営む。その生活を支配しているのは、彼女たちには理解できない言葉を話す地元の男たち、そして彼女たちが理解する可能性ゼロの言葉を話す外国の男たちである。
>
> このような状況に置かれては、アフリカの女が腕を組み、倒れ、死んでしまいたくなっても不思議ではない。しかし彼女はそれだけはしない。彼女はなおもへこたれない。今日のアフリカの女は、みずからの過去を正統に継承する者である。われわれは闘争を強化しなければならない。例えば、…「ジェンダーと階級から来る抑圧、そして帝国主義と搾取に…［抵抗し］、政策決定、法改正、教育、雇用、金融の平等への道を［探らなければならない。］」(48)[14]

エドゥが唱えるのは、アフリカの女の解放のために、アフリカ土着の草の根のフェミニズム思想を語りなおす必要性である。すなわち、アフリカのフェミニズム言説を担ってきた知識人が、村の母たち――母、おば、姉、従姉ら、アフリカでは区別せず「母」と呼ばれる年上の女たち――のサバルタンの語りに耳を傾け、そこから学び、それをよりどころとして、アフリカ・フェミニズムの理論と実践を強化しようというのである。これまで女は伝統と結びつけられ、近代化の過程から排除されてきたし、それをフェミニストは批判してきたのだが、今あえて解放の方策を「アフリカの伝統」に求めようというのである。

しかし、女にとっての民族の言説は、男の犯した過ちを免れうるのか。本来は植民地主義と男性中心主義にたいする抵抗言説だったのがエリートの言説と化し、ヘゲモニーを強化するに終わらないのか。アフリカの女を定義する言説は、サバルタンを自己の経由地としての「他者」でなく、まったき他者として語りえるのか。語りえないとしたら、そのことにいかに自覚的（リフレクシブ）かつ批判的（クリティカル）でありうるのか。

このあと本稿後半では、『デスティネーション』の主人公が、アフリカ近代国家において「アフリカの女」としての自己位置を模索する過程を追う。彼女は最初は西洋流のリベラル・フェミニズムを標榜していたが、それを排して草の根の女の知恵を継承し、フェミニズムをアフリカ化していく。主人公の軌跡を分析することによって、アフリカ・フェミニズムの課題である、男中心の民

図３：女性兵士をめぐる言説の三元的配置



１３．アフリカ女性文学研究の展開については大池「アフリカ」および「海外」を参照。

１４．エドゥは以下の記事から引用している。Bisi Adeleye-Fayemi, letter, *West Africa* 3-9 Feb. 1992: 176.

族言説にも西洋中心のフェミニズム言説にも回収されない「アフリカの女」の解放言説への困難な道筋を示したい。そのさい、佐藤文香が提示した差異と平等と軍事化の座標を使って分析を進める。字数制限上、ここでは表のみ示しておくので、詳しい内容については佐藤論文を参照されたい。佐藤の表はアメリカの状況をもとに考案されたもので、アフリカの状況を分析するには当てはまらない部分もある。本稿では、第三世界の女の内部に存在する階級差を分析軸として加えることで、民族、女、代弁／表象の問題を第三世界の立場から考察する。

Ⅲ.『デスティネーション・ビアフラ』分析

A．男と対等な位置を求めて

『デスティネーション』の前半、すなわち第一部のほとんどを占めるのは、ナイジェリア独立前夜から内戦開戦にいたるまでの汚い権力闘争の描写である。エメチェタは視点を植民地官僚、アフリカ人政治家、軍人などさまざまな立場に置きながら、政治の内幕を描く。物語が始まってまもない段階では、主人公のデビーもこのような男中心の権力闘争のなかで位置を与えられ、男にとってどういう意味があるのかという面から性格づけをされる。具体的に言えば、デビーがまだ読者の前に姿を現していない段階では、彼女は腐敗しきった政治家の自慢の娘、ないしはアフリカを搾取するイギリス人将校の恋人として、男たちの噂話のなかで言及される。またパーティーで「ヨーロッパ人なみにしゃべりふるまう」デビーを見て、ある将校が「国会議員になればいい」と皮肉ると、植民地官僚は「議員の女性秘書だろう」と言い、父親は「いや首相夫人だ」と応じる（44 - 5）。このようにデビーは、国家建設の中心となるエリート階級に属してはいるが、それは男の付属物としてでしかないことが印象づけられる。新生アフリカにおいてエリートだが女――これがデビーの位置づけであり、本稿で分析していく彼女の問題はここから発生している。

物語が進行するにつれて主人公は前景化され、その困難な社会位置も彼女の内面から照らされることで鮮明になる。『デスティネーション』以前のエメチェタ作品の主人公はみな、村出身の素朴な女だった。それとは対照的に、デビーはオックスフォードを卒業し、「フェミニスト」として意識覚醒した現代的な女である。その意味で、デビーが初めて読者の前に姿を現す場面は、まずはデビーの寝顔を観察する恋人の目をとおして外側から描かれてはいるものの、示唆に富んでいる。デビーは「ほっそりとして美しいが傲慢。知的で一緒にいると楽しいが独立心旺盛。あまりにイギリス的」（36）である。つまり前段落で述べた点と考え合わせれば、デビーは、ヨーロッパ仕込みのフェミニズムを男中心のアフリカ新興国家で実現しようとする新しい女であり、「大変なアイデンティティの問題をみずからの手で作っている」（36）のである。

しかし、湾岸戦争後のわれわれが問題にすべきは、デビーが標榜する「フェミニズム」の内容である。というのもデビーは、「フェミニスト」意識から軍隊に入隊するという決断をするからだ。[15] それゆえデビーは、佐藤の表の③に位置づけられる。デビーの決意を聞こう。「私はけっして彼ら［両親］のような結婚には賛成しまい。パートナーどうしがけっして対等ではない結婚には。…出産、子育て、よき妻…となる以上のなにかをしたい。…そう、入隊しよう。知識人や大卒がナイジェリア軍に加わろうというのなら、私もそのうちの一人になろう。女にはかなり大変だろうけど。…でも私は戦う。…コックや看護婦としてではなく、ほんとうの将校として！」（45）ここで注意が必要なのは、厳密に言うとデビーは必ずしも「戦う兵士」を目指してはいないということだ。彼女はむしろ、軍隊キャリアをエリート女性の出世コースのひとつとしてとらえている程度には「リベラル」である。「彼女にとって、入隊するといっても実戦に携わるという意味ではな」（57）く、実際彼女は、「急速に増加しつつある兵隊に英語を教える」（74）訓練を受ける。すなわち、できたての野蛮な国軍を文明化する役目、いわゆる軍隊の「女性化」をデビーは担ったのだ。その意味でこの段階のデビーは、佐藤の表の③と③' を行き来しているということができよう。

だがどのように条件をつけようとも、いずれにしろデビーの望みの本質は、男と同等に国造りを担いたいということにあり、その目標のために、国家建設の基本ルールとなっている軍国主義、男性中心主義を受け入れざるをえない。[16] デビーは軍隊を国造りの最先端の現場としてとらえ、軍事化された国家建設が男性中心の原理に基

１５．女性兵士問題は1991年の湾岸戦争をきっかけに日本でも議論を呼んだ。加納はそれを第一次論争と呼び、90年代の終わりに再燃した議論を第二次論争と呼んでいる。第二次論争については 江原、加納、牟田、中山、佐藤、白井、田島、上野「英霊」および「女性」を参照。したがって Frank、OkerekeまたはNwagbaraのように、デビーを女性解放のシンボルとして持ち上げるのは、あまりに単純な議論である。

１６．アメリカにおける女と市民権、兵役の問題については、Kerberを参照。

づいていることには目をつぶるのである。デビーの「フェミニスト」的所作が女の抑圧を容認し、結果的にそれに力を貸しかねないということは、政権運営を協議する男たちの会話から明らかにされる。彼らはデビーを国造りの対等なパートナーとしてはとらえておらず、ある将校は、デビー入隊を許可する理由を次のように語る。「彼女のイギリス人の恋人をとおして、武器が潤沢に供給されるように図ってもらおう」(69)。彼らにとって彼女のフェミニズムは、軍事化という彼らの目的のため女を利用するための方便にすぎない。将校は次のように計算する。彼女は「いわゆる洗練された外国教育」(69) を受けているから、大臣だった父親をクーデターで殺されたのを恨むどころか、伝統的な家族のつながりよりも女の解放と国の解放を重んじ、「もし新国家を作る手助けをしてくれと言えば」(69) それに喜んで手を貸すだろうと。彼女の「フェミニズム」はこうしていとも簡単に無化され、軍事化のための「便利な道具」(69) と化す。こうして男の側からデビーの所作を解釈してみせることによって、入隊という「フェミニスト」的決断が男の論理で翻訳され、その限界が示される。

そしてさらに、デビーがみずからの行為を軍国主義に一致させることで③の位置から④の位置に移動し、その結果多数の死者を招くにいたって、彼女の「フェミニズム」は完全な自己矛盾に陥る。上述のようにデビーは、戦闘性の低い「女性的」な軍隊キャリアを目指したにもかかわらず、実際に任務に当たると、完全に男の世界に一致してしまう。否、一致しようとするといった方が正確であろう。というのも、任務につくデビーの身振りはしょせん模倣でしかなく、彼女がけっして完全な男にはなれないことを、むしろグロテスクなまでに示してしまっているからだ。デビーは「声に重みを持たせようと、細い首の筋がくっきりと見えるほどにあらんかぎりに叫」(79) ぶ。捕らえられたビアフラ軍将校たちは女の連邦軍将校に直面し、「なにをしようと、どんなに武装しようと、命令を下す位置にいようと、しょせん女なんだ、とでも言うように、面白がっているのを隠そうとしな」(79) い。男のパワーゲームのルールに従っているかぎり、女であるデビーは二流のプレーヤーでしかない。だからこそデビーは、ヒステリックなまでに男らしくなろうとし、男よりいっそう残酷になろうとする。こうしてデビーの命令のもと、ビアフラ軍将校は新米兵士の手によって皆殺しにされる。デビーは男が作った戦争のルールにぴったりと身を添わせ、もっとも男らしい女、または佐藤の論文に即して言うならば、男女の差を超越したG・I・ジェーンとなる。かくして軍の女性化をもくろんだデビーは、逆に女の軍事化を招いてしまう。そこには男女の差はもちろん、男女の平等すらなく、ひたすら強者が弱者を力で支配する世界があるのみである。

B．男と違う位置を求めて

しかしほどなくしてデビーは、男女平等を目指して男を真似ることの限界に気づき、今度は男女差に訴えて女ならではの役割を演じることを決意する。すなわち、捕虜虐殺の報告を後から受け、デビーはみずからの犯した罪におののき、今度は、連邦側の指導者の命によって、ビアフラ側指導者に和平を説く隠密の使者となるのである。いわばデビーは、女であるがゆえ本質的に平和を司る者であるとして②' の位置に身を置く。一方指導者たちは表の②に位置する。彼らは軍隊でデビーが活躍するのには賛成するが、それはあくまでも女役割を果たすかぎりにおいてである。このことは、ある政治家がデビーに告げる次の忠告の言葉によく表れている。すなわち、「自分の手に負えないことに首を突っ込んじゃいけない。そして忘れちゃならないのはだね、お嬢さん、君は女だってことだ。だからこそわれわれは君にこの微妙な使命を与えているんだ」(129)。

ここでデビーの女性性は、平和の象徴としてだけでなく、性的おとりとしても動員されていることに注意しておく必要がある。これは佐藤論文ではじゅうぶん論じられていない点である。女性性はつねに、母と娼婦の二重性をともなって動員され、母体としての女を強調する本質主義は、かならず同時に女体としての女をも強調する。『デスティネーション』では、デビーという一人の女にその両方の役割が賦与される。というのも、説得相手であるビアフラ軍指導者は、デビーにほのかな恋心を抱いており、連邦軍側の指導者の言葉をかりれば、デビーは「女の魅力を使ってやつの氷の心を溶かす」(123) ことができると期待されているからだ。デビーが皮肉るように、「この男たちは、私が自分のセクシュアリティを使えば、アボシ［ビアフラ軍指導者］に立場を変えさせることができると言うのね。私の体を使えというわけね」(126)。

もっとも、デビーは自分でもあえて女の立場を利用する。たとえば恋人の白人将校から情報を引き出したいときには美しく着飾り (109 - 10)、甘え (112)、あついセックスを交わす (114)。黒人将校のラワルは「黒人の娘は教育を受けると、黒人の男はもう自分にふさわしくないって考えるのはどうしてかな。あの白人にとっておまえはただの売春婦で、使われて棄てられるだけさ。やつらが

おれたちの国にやってるのと同じさ」(125) と愚弄し(ラワルについては後に詳しく分析する)、デビーはそれに憤慨する。しかしラワルの側に白人コンプレックスという問題はあるものの、恋人にたいするデビーの日和見的な行動を見ると、彼の皮肉はまったく的外れとも言えない。このようにデビーは、男に女性性を利用されているのに気づきながら(「あなたたち男がこの騒ぎを起こしておいて、私たち女を呼びつけて片づけさせようって言うのね」115)、和平という大儀のために「戦略として」男たちの策略に乗ってみせるのである。

しかし、実際に戦争という弱肉強食の状況下に置かれると、デビーは女性性を主体的に戦略として使うどころか、それを暴力的に搾取されるだけとなる(「これは戦争で、戦争という状況では男は自制心を失うんだ」119)。というのも、隠密の任務のもと、部隊とは分かれてビアフラへ向かう途中、デビーは兵士の一団に出くわし、彼らに集団レイプされるからである。皮肉なことに、デビーは連邦政府に命じられて働いているのに、同じ連邦政府側の兵士たちは、デビーを手中に落ちた戦利品、犯すべき女としてしか見ない。デビーと兵士の一団との対決は、戦争の表向きの大儀を捨象した、女と男の対決として表象される。デビーがぶかぶかの軍服に身を包み、「あらんかぎりの鋭い声を上げて『私はナイジェリア軍兵士よ』と叫ぶ」(130) と、相手方のリーダーは、「よたよたと彼女の前に進み、『私はナイジェリア軍兵士よ』と声をまね」(131)、「たくさんの獰猛なライオンのほえ声のよう」(131) に哄笑する。こうしてデビーは圧倒的な男の力の前に屈し、レイプされ、彼女の高い階級、学歴とは無関係に、「兵士にレイプされた穢れた女」として位置づけられることになる。事件の直後、レイプの傷を癒すため、デビーは友人宅に身を寄せ、母に介抱される。そこでデビーに仕える召使の娘は「だれともわからない兵士の子を産まされた17歳の母親」(157) だが、集団レイプの記憶に苦しむデビーを見て、「自分より悲惨な女がいることにある種の満足感を覚え」(158) る。社会階級の違いにかかわらず、二人は同じように「穢れた女」のスケールに置かれ、もちろんいっそうおとしめられるのはデビーの方だ。こうしてデビーは、主体的に女性性を利用するつもりが、女の性を搾取され、女体そのものに還元されてしまう。

C. 男と対等だが男と違う位置を求めて

女体に還元され、アイデンティティーをはぎとられ、デビーはビアフラへの旅を再開する。[17] 男と対等だが男と違う位置を求めて。母の言葉を借りれば、「この子は娘に生まれたのに男になりたがり、自分が男になりたがっていることを男に知らせたがる。でもそれなのに女らしさもとどめておきたがる」(161) のである。かくしてデビーは、「私に落ち度はないのに、今や世間の目からすれば私は穢れた女だ——このことを自分に忘れさせるため」(159)、ふたたびビアフラに向かう。しかし今度の目的地(デスティネーション)は、かつて男たちが戦いの目標とした真に解放されたアフリカ国家、ビアフラ (60) ではもはやない。それはデビーの「夢のビアフラ」(160) であり、そこで彼女は自分の新しい位置——佐藤の表でいう④' ——を見つけるはずだ。そこへの旅は、「アボシ [ビアフラ側指導者] とモモー [連邦政府側指導者] のあいだの闘い」ではなく「私たちの闘い」(160) となる。それを象徴するように、デビーは軍服を脱ぎ捨て、ビアフラに母を訪ねに行く娘に扮し、土地を追われてビアフラ地域に向かう難民のグループに加わるのである。

こうして新たな旅に出たデビーを、ふたたびレイプの危険が襲う。しかし今度は、デビーは男中心の論理を暴き、力関係を転覆する。物語では、先述した黒人将校ラワルが、ビアフラ討伐を率い、デビーら避難民グループに遭遇。隊長であるラワルはデビーをレイプしようとする。先に述べた第一回目のレイプでは、デビーは匿名の女として扱われたが、この二回目のレイプは、デビーが社会的に象徴するものを正確に把握したうえで、それにたいする復讐として行われる。すなわち、先に引用したラワルのセリフから明らかなように、①の位置にいるラワルにとって、デビーはヨーロッパ流の教育を受けたエリートの女、男なみになりたがる女、黒人の男をばかにして白人の男と寝る女を象徴し、この女をレイプすることで本来の位置、つまり黒人の男に従う女に戻すことになるのである。ラワルと対峙してデビーは「一人の女、そして一つの身体としての自分を意識」(174) する。ラワルは言う。「まだやつ [白人将校] の慰み物をやってるんだな。きさまらみな売国奴だ。母国を外国勢力に売りやがって…ただの女、ごく普通の女だってことを思い知らせてやる」(175)。

しかしレイプは成功しない。なぜならデビーは「どんな男にたいしてももう二度と濡れない、やわらぐことがない」(176) 体になっているから。だがこの喜びの不在

17. 旅のモチーフの分析については、OkerekeおよびUmehを参照。

から、デビーは転覆の力を得る。「砂漠みたいにカラカラで、ばばあみたいにしおれきりやがって」(175 - 6)というラワルの呪詛の言葉を聞き、デビーは、自分のセクシュアリティーを奪ったのは他でもない、ラワルのような男の暴力なのだと告発するのである。「あんたが犯そうとしたのは、たくさんの兵士にレイプされた女、病気を持ってるかもしれない女、黒人のナイジェリア兵にレイプされた女。白人の慰み物とやらを使ってやろうと思ったみたいだけど、あんたの腕のなかにいたのは兵士と寝た女だったのよ」(176)。ラワルがデビーをレイプしようとした理由は、上の段落に述べたように、黒人の男をばかにする西洋かぶれの「フェミニスト」に、しょせん女だということを思い知らせるためであった。黒人エリートである彼は、白人と寝る女をレイプすることで、白人よりも、そしてもちろん女よりも、優位に立つはずだった。したがって、デビーが下級黒人兵士にレイプされた穢れた女ならば、レイプの意味がなくなる。むしろ性行為をとおしてラワル自身も汚染され、野蛮で無教養な下層兵士と同等になる。しかしレイプを試みたことにより、すでにラワルは彼らの行動をなぞっているのであり、彼らと同等になっている。それが見えていないラワルは、自分は汚されていないと信じ、「こんな女と関係を持とうもんならおふくろは自殺するな」(177) とうそぶく。ラワルの言葉にひそむ白人コンプレックスと男性中心主義を、デビーは次のように指摘する。「でももし私が白人兵士にレイプされていたら、彼女［ラワルの母親］は私のことをましに思ってくれたかしら。もしあんたが私を犯した最初の男だったら、他の男の母親はどう思ったでしょうね。あわれな男ども、あんたたちはたくさん問題を抱えてる。しかもみずから作った問題を」(177)。デビーを女の身体に還元しようとしたラワルは、こうしてむしろ、男としてのみずからの身体性を突きつけられ、ここで力関係は転覆される。

だがその転覆は、ラワルら男の論理をなぞることによってしかなされない。[18]「黒人兵士と寝た穢れた女」という社会による定義を、上の引用のように口にして、デビーは「疲れきり」そして「空しく」(176) なる。レイプの記憶はけっして自分の言葉では語りえず、男の言葉でしか語りえない。上の引用に続けて彼女は言う。「ここ［ラワル専用のテント］に朝までいてあげるわ。あんたの部下にあんたがほんとうの男だって思わせておけるように。彼らのために叫び声でもあげてほしい？そうすればもっと嬉しいかしら？」(177) こうして男の論理をなぞることで、それが破綻しているのは浮き彫りにされるものの、やはり彼女のセクシュアリティは奪われたままである。そして自己定義し直す言葉を手に入れるために、彼女はさらに旅を続ける。

D．サバルタンの代弁／表象

この夜、ラワル率いる連邦軍部隊に、難民グループの男たちを皆殺しにされたため、デビーは、残された女たち、子どもたちとともに旅を続ける。とはいえデビーは、彼女らと単純に連帯することはできず、両者のあいだの壁は簡単に越えられない。デビーがアフリカの草の根から隔たっているということは、彼女がごく普通の女のように乳幼児を背負うことすらできないことに象徴される。デビーは自問自答する。「私の歳のアフリカの女はこういう赤ん坊を一日中背負い、しかも農作業をし、料理もしている。今私は歩いているだけなのにこんなに痛いなんて。いったい私はこれでもアフリカの女と言えるんだろうか」(191)。そして仲間の一人、ウゾマ（後述）は「なんだってあんたはあたしらと一緒に苦しもうってんだか」(191、傍点筆者）とデビーを突き放し、「あんたらたくさん勉強した人たちってのはねえ。あんたらがやってることの理由なんてわかるもんかね」(192) と距離を置く。また、避難のときに顔にこびりついた泥が、ロンドンの高級サロンの美容パックと同じ効果があると気づいても、他の女たちには別世界の話であるためそのアイロニーを共有できず、「こういったときデビーは、他の女たちに囲まれながら心底孤独に感じた。彼女が受けた教育、外国から移入された階級による分断が、どうしても障害となっていた。デビーは必死にそれを振り落とそう、仲間の一人になろうと努力したが、こんなとき、完全に受け入れてもらうのはまさに不可能に近いことだと自覚した」(211)。

しかし「共通のアフリカ性が前景化する」(212) 瞬間もある。それは例えば、避難の途上でグループの一人が取り上げ命名した新生児、母親が死んだ後は別の女が乳を与え、デビーが背負ってきた新生児、「その赤ん坊、彼女らの赤ん坊が死んだ」(212、傍点筆者）ときだ。「子どもは単に生物学上の両親の子どもではなく、共同体の子ども」(212) なのだ。さらにまた、それまで女たちと一緒に耐えてきた少年が、兵士に撃たれた瞬間、デビーと女たちは突発的に兵士に駈け寄り「ほら、あたし

18．Ojo-Adeはここを読み違えて、デビーが男の論理に懐柔されたと批判する。対照的に、Allanは転覆の力を読み取っている。

らみんなを殺しとくれ、あたしらを撃ち殺しとくれ、どうか殺しとくれ」(221、傍点筆者) とヒステリックに叫ぶ。共同体みなで子どもを育てる、そして子どもを育てることによって共同体となり、それこそが生きる理由だ、という哲学は、[19]次に引用するウゾマの言葉が雄弁に語る。夫に先立たれ、避難にも疲れて、グループの一人は死のうとするが、ウゾマはそれを諭して、子どもたちのために生きるよう励ますのである。

> 恥を知らんかね、この女は。恥を！…あんたはそれでもイボの女かね。いったいどこの田舎から出てきたんだか。あんたを娘として育てた母親は不幸だよ。いったいいつから、男たちが、あたしらの子育てを手伝ってくれるようになったんかね。あんたの実家の村には年寄りはおらんのか。子どもらを育ててくれる年寄りが。…そう、男らは役に立った、役に立ったさ。でも他の男らに殺されちまった。あたしらには面倒をみなきゃならん子どもがおる。ばあさんらと一緒さ。ばあさんらが面倒をみた子どもが親になってあたしらを生んだんだ。だからまだ先が長いのにドロシーが死にたがる理由があたしにはわからんね。…つれあいが二人の子どもをくれたんだろ。…その子らの面倒がみれるようちゃんと生きなきゃならんと思わんのかね。男が苗字をくれたからってもとの苗字を忘れちまって、つれあいに養ってもらってるあいだにうすらばかになっちまって。もう一度自分になるんだよ。畑仕事がつらけりゃからだを売りゃあいい。こんなこといまさら言わせんじゃないよ。子どもは生きにゃならん。さあみんな立って。あたしらと同じ気の毒な女の息子を土に返そうじゃないか。…男どもったらね！何年か前は「独立だ、自由をあなたに、自由を私に」だった。あたしらはいつも後ろにいた。自由が殺し合いの自由になって、男どもはあたしらを残して逝っちまい、あたしらは男たちを葬って子どもを育てろって言うんだ。この子らが大きくなった頃にはまた、理由をつけて殺し合いを始めるんだろうよ。…ここに十字架を立てて先に進もう。(212 - 4)

こうしてサバルタンの女は、国家建設が国家破壊に変容するという男の欺瞞を見抜き、協力して幼い者を育て、共同体を作り上げ存続させる主体として女を位置づける。[20]

上の引用をとおしてウゾマが唱える共同体哲学は、アフリカの女が女から女へ伝えてきたものであることを物語は示す。というのも、ウゾマは絶望する仲間を平手打ちし、子どものために生きのびるよう諭して引用の言葉を述べるのだが、これはまさに、避難を始めたばかりの頃、グループのなかで最年長の女がとった行動と一致するからだ。彼女は「大胆な老女」またはたんに「老女」と呼ばれ、名前を与えられない。老女は「その年齢と勇気により彼女らのリーダーとな」(188) る。そしてヒステリックにふるまう兵士に「息子よ」(172) と語りかけてしずめ、哀しみにくれる女に「娘よ」(187) と語りかけて慰める。そして女がそれでも泣き止まないと、平手打ちして目を覚まさせるのである。妊婦のお産を介助し、新生児に命名するのもこの老女である (189)。老女は避難の途中で体力がつき、息絶えるが、彼女が示した哲学は、ウゾマら次の世代の女に確実に伝えられる。その意味でこの無名の老女は、まさに「語る」ことができたのだといえる。

さらにこの哲学は、『デスティネーション』をつうじて母親世代の女たちによって繰り返され、それは特権階級の女にも及ぶ。彼女らは平和なときは権力者の夫に従っていたが、戦時という非常時にこの生き残りの哲学を示すのである。たとえばデビーの母は、デビーがレイプされて生きる希望をなくしているとき、「看護し、話しかけ、祈り、そして叱った。すべて過ぎたこととして忘れ去りなさい、今でも完全に普通の人生を歩むことができるんだからと」(157)。これまで母親を伝統的な役割にしばられた人形としてしか見ていなかったデビーは、母親の変化に驚きを隠すことができない。また、ビアフラ側のある政治家が最後まで勝利を盲信しているのにたいし、彼の妻は「夫と一緒に死ぬのはごめんだわ。生きのびて子どもがちゃんと一人前になるのを見届け、できれば子どものそのまた子どもにも会って、ビアフラの物語を教えてやるのよ」(253) と、夫を残して一人逃げる。この変容ぶりはウゾマのそれに重ねられる。夫と一緒だったとき、ウゾマは「頭をけだるそうに杭にもたせかけ…目を重たげに上げ…ささやくように話していた。今やその女が、夫が死んで3日もたたないうちに、堂々と他の

19. この哲学はきわめて保守的に解釈される危険もある。例えば Odege は女性詩人、キャサリン・アチョロヌ (Catherine Acholonu) がナイジェリアの内戦詩のなかで語る共同体哲学を解釈するのに、家父長制を維持するための役割としての母性を強調している。

20. Bryce も複数の女性作家によるナイジェリア内戦文学を分析し、その共通性を存続の哲学に見出す。Ezeigbo も "Vision" においてワバの作品を分析し、やはり同じ結論に達する。

女を平手打ちして、自己憐憫にふけるのは止めろと言うのだ」(213)。こうして特権階級に属するデビーの母親らと、市井の女であるウゾマが重ねられ、階級を超えた女の伝統的な哲学はいっそう強調される。

このように『デスティネーション』において、階級を横断して女たちが共有してきた伝統的な知恵が示されるが、ではデビーは、サバルタンの女と連帯しえたのか。サバルタンの女は語り、デビーは、そしてわれわれは、それを聞いたのか。サバルタンの女に代わってデビーが語るのではなく、女たち自身が自分の言葉で語ることができたといえるのだろうか。

D．代弁／表象の不可能性をパフォームする物語

じつは物語は、女の連帯を強調するところでは終わらない。[21] 生きのびたデビーは女たちと別れ、ビアフラ軍指導者に会い、ふたたび男の策略のために奉仕する。小説中、これまでの虐殺や避難の部分は、生きのびた知人たちからエメチェタが話を聞いて、それを再構成したものであるのにたいし、これ以降の部分は、ほとんどがエメチェタの創作だと思われる。描写はとたんにあっさりとなり、文章は力を失う。本稿の主題であるサバルタンの代弁／表象という問題についても、デビーがイギリスに派遣され、各国のジャーナリストに話をした（241）と伝えるだけで、彼女が彼らになにをどう語ったのかは書かれない。この部分全体をつうじて会話はほとんどなく、読者は一連の事件の報告を読まされるのみである。

そして唐突に、ラストシーンで、今後の国家建設におけるエリートの女の役割が、デビーの口から宣言される。ラストシーンでは、終戦前夜、ビアフラが連邦軍による最後の大空襲にさらされるなか、ビアフラ側の指導者は、白人とともにひそかに外国に逃亡。デビーはそれを目にし絶望しながらも、自分は戦後の社会再建に尽くすことを誓う。この場面の描写は一変してリアルなのだが、おそらくラストシーンのイメージは、作者の頭のなかにもとから強力にあったからではないだろうか。いずれにしろ問題は、この最後の場面と以前の女たちの避難の場面とが、物語をとおしてつながっていないということである。言い換えれば、前の場面でウゾマが語るサバルタンの女の生き方宣言と、この場面でデビーが語るエリートの女の生き方宣言が、有機的につなげられていない。抽象的に思想レベルでつながってはいても、物語のレベルで統合されていない。[22] これは前に述べた老女とウゾマのつながり方とは対照的である。このことをどう解釈したらよいのか。

それを解く鍵は、デビーの宣言にある。ラストシーンでの彼女の宣言を聞いてみよう。恋人の白人将校が、ナイジェリアを去って一緒にイギリスに行くことをデビーに提案すると、デビーはそれを拒み、戦後の生き方を次のように語る。

「もし君が望むなら結婚しよう。でもなんとしても、神に見捨てられたこの国を去らなければならない。もしアボシ［ビアフラ軍指導者］が去るというなら、君だっていいだろ？」
「アボシや彼の類はまだ植民地化されているのよ。彼らは脱植民地化される必要がある。私は彼とは違う。黒い白人とは。私は女、アフリカの女。私はナイジェリアの娘。もしナイジェリアが辱めを受けるなら、私もここにとどまって、ナイジェリアとともに恥をすすぐ。おことわりよ。やっぱり私の国を搾取する者の妻になるつもりはないわ。」
「デビー、君は狂ってる。このあといったいどうしようって言うんだ。ここには君の場所なんかない。言っておくがね。」
「二人の少年がいるわ、ンウォバ家の息子たち［難民グループにいた孤児］が。他にも孤児はたくさんいるから、父の遺産で養育するつもりよ。それに私の手記を出版する。数人のサンドハースト［イギリスの兵士訓練校］卒の兵士が夢を現実にしようと野望を抱いた物語を、あの孤児らに話すわ。」(258 - 9)

共同体の成員を育てることで共同体を担い、生きのびるという点で、このデビーの宣言は先のウゾマの宣言とたしかに一致する。それ以外にデビーがエリートの使命と考えていること――それは物語を書いて後世に伝える

21．Porterはデビーが兵士から難民へと変化する過程をフェミストとしての成熟ととらえ、その点は筆者も同意する。しかしPorterの分析に階級の視点が欠けているため、女の連帯賛美で終わってしまう。一方、Nwachukwuは『デスティネーション』に階級の問題が十分表現されていないことを批判するが、本稿のようにパフォーマティヴィティーの理論を使って分析すれば、『デスティネーション』がまさに階級の問題を演じているのが明らかになろう。

22．デビーは人物ではなく、作者のイデオロギーを体現する繰り人形に過ぎないという批判は多く、エメチェタに好意的なフェミニスト研究者ですら、その欠点を認めている。以下を参照。Allan 215-6; Porter 314-5, 326; Nwachukwu-Agbada 392-4; Frank 27-8.

ことだ。

物語を書くのがエリートの責務だということは、この場面に至るまでに小説中で三回にわたって言及されている。最初の場面では、デビーはかつて泊まったロンドンの三ツ星ホテルと、前の晩、避難に疲れて眠った森を比べ、「内戦の歴史が書かれるとき、私やバブス［デビーの友人］、ウゾマ、ビアフラの修道女らのような女たちが担った役割は、いったい語られるのだろうか。…森で苦しむ私たちのような庶民の惨状は海外に伝わっているんだろうか」(195) と、エリートの視点から現状を観察し、嘆く。ロンドンのホテルに宿泊できるというみずからの特権性にたいする批判は見られず、サバルタンの女とエリートの女との関係、そして海外の役割にたいする分析もされない。

だが物語が進むにつれ、デビーは女たちと経験を共有し、女たちの一員となる。そして自分たちの経験を代弁／表象するのが教育ある自分の責務だととらえる。「もし私が殺されたら、女たちの戦争体験の物語はすべて失われることになる。出来事の多くは危険すぎて書きとめられないため…［彼女はそれらを記憶にとどめ、執筆しようというときに］思い出を引き出せるようにしていた。生きのびなくては。女たちのためだけではなく、［途中で殺された］ンベチのような少年の記憶のためにも」(223 - 4)。

もっとも終わりに近い場面では、デビーは女たちと別れた後、知人の政治家の邸宅に滞在している。そして避難の疲れも回復し、軍からの指令を待つかたわら執筆をしていることが明らかにされる。「おもしろい本になるわよ。タイトルは『デスティネーション・ビアフラ』にしようと思ってるの」(246)。

2回目のシーンに比べ、3回目のシーンでは明らかに後退が見られる。デビーは体験の現場から隔たり、記憶を「おもしろい」物語として再構成しタイトルを付する。こうして作者の統御によって一貫性を持たされた物語は、経験された出来事と等しいとは言えまい。このズレは、2回目の引用の環境（爆撃される町から女たちともに逃げる最中）と3回目の環境（政治家の屋敷）との落差によって明らかである。しかしそのズレにたいして、デビーはなにも意識していない。

それでは、デビーが目指したエリートの女の使命、すなわちサバルタンの女を代弁／表象するという使命は、失敗したのだろうか。別の言葉で言えば、彼女は目的地（デスティネーション）にたどり着けなかったのだろうか。

それほど単純ではないだろう。なぜなら上の引用から明らかなように、読者が読んでいる『デスティネーション・ビアフラ』は、エメチェタが書いたものであると同時に、デビーの手によるものでもあるからだ。あるレベルでは、われわれ読者が読んできたのは、エリートであるデビーがサバルタンの女たちの記憶を物語化したものでしかなく、けっしてサバルタンが語った自己表象ではなかったといえる。ウゾマのセリフも老女のセリフも、デビーが事後的に、現場から隔たった政治家の邸宅でまとめたものだった。それがため最後の場面は強引につなげられ、物語は失敗した。そしてこれは当然、アフリカの女を代弁するとされる女性作家、エメチェタの限界を示しているのかもしれない。

しかし別のレベルでは、物語はこのような表象不可能性それ自体をパフォームしているとも考えられる。小説を読んだ読者の心に残るのは、避難の場面の圧倒的なリアリティーだが、デビーが最後に行きついた立場、そしてエメチェタが身を置く立場は、そこから決定的に隔たっている。そして両者のズレが物語の説得力、完全性、論理を脅かし、『デスティネーション』は、語りきれないものをつねに含むという物語の宿命を負わされる。そしてその語られないものこそ、出来事を出来事たらしめているものであり、記憶と物語の越えられない一線なのだ。われわれはけっして記憶を完全に物語化することはできず、サバルタンは代弁／表象されえない。物語化、表象、代弁したとたんにズレが生じ、それは物語の不完全さとして物語の統御を脅かす――このように、物語の限界を物語自体が指し示しているという意味において、つねに未完の『デスティネーション・ビアフラ』は、代弁／表象の不可能性そのものをパフォームしているのである。

Ⅳ．まとめおよび今後の課題

本稿では、現代ナイジェリアの女性作家ブチ・エメチェタが、ナイジェリアの内戦をテーマとして書いた作品『デスティネーション』を取り上げ、エリートの女がサバルタンの女を代弁／表象するという問題を考察した。

本稿前半ではまず、『デスティネーション』の献辞と前書きに注目し、「抑圧されるアフリカの女を代弁する女性作家」と目されるエメチェタが、自分が直接経験していない戦争を、人々の記憶に負いながら物語化するという問題を前景化した。そしてこの問題を、アフリカ・フェミニズムの流れのなかに位置づけ、アフリカのフェミニズム言説を担ってきたエリートが、1990年代以降、草の根の知恵に解放の道を探ってきたことを指摘した。

本稿後半では、具体的に『デスティネーション』の作

品分析を行った。西洋的なフェミニスト意識を持つ主人公が、サバルタンの女たちとの経験をとおして、アフリカのエリートの女の応答責任を自覚し、女たちの経験を代弁／表象しようと決意するまでの過程を分析した。『デスティネーション』においてサバルタンがみずからを語りえていないとしても、むしろそのようなほころびをとおして、物語は代弁／表象の不可能性それ自体をパフォームしているということを示した。

今後の課題としては、セクシュアリティの問題を挙げておきたい。IIのCで分析したように、主人公は自分のセクシュアリティを奪った男の罪を告発するものの、物語の最後にいたっても、セクシュアリティを自分のものとして回復することはない。物語はむしろ、この問題を棚上げしたまま、母性——もちろんそれは、慈しみ育てる能力として非本質化されてはいるが——を強調して終わってしまう。本稿ではこの点について考察を深めることができなかった。それは物語が、セクシュアリティの回復について沈黙しているからではある。しかしだとしたら、その沈黙の意味を含めて、今後分析していく必要があろう。

参考文献

Acholonu, Catherine Obianuju. *Into the Heart of Biafra*. Owerri, Nigeria: Totan, 1985.

African Literature Today. 17(1989). Special issue on question of language.

African Literature Today. 18(1990). Special issue on oral literature.

Aidoo, Ama Ata. "The African Woman Today." *Sisterhood, Feminisms and Power: From Africa to the Diaspora*. Ed. Obioma Nnaemeka. Proc. of a Conference on Women in Africa and the African Diaspora (WADD) in Nsukka, Nigeria. 13-18 July 1992. Trenton, NJ: Africa World, 1998. 39-50.

Allan, Tuzyline Jita. "Trajectories of Rape in Buchi Emecheta's Novel." Umeh 207-25.

Amadiume, Ifi, and Abdullahi An-Na'im, eds. *The Politics of Memory: Truth, Healing and Social Justice*. London and New York: Zed, 2000.

Amuta, Chidi. "A Selected Checklist of Primary and Critical Sources on Nigerian War Literature." *Research in African Literatures* 13 (1982): 68-72.

---. "History, Society and Heroism in Nigerian War Novel." *Kunapipi* 6.3(1984): 57-70.

---. "Literature of the Nigerian Civil War." *Perspectives on Nigerian Literature: 1700 to the Present*. Ed. Yemi Ogunbiyi. Vol. 2. Lagos, Nigeria: Guardian, 1988. 85-92. 2 vols.

---. "The Nigerian Civil War and the Evolution of Nigerian Literature." *Canadian Journal of African Studies* 17.1 (1983): 85-99.

Bishop, Rand. *African Literature, African Critics: The Forming of Critical Standards, 1947-1966*. Contributions in Afro-American and African Studies 115. Westport, CO: Greenwood, 1988.

Bryce, Jane. "Conflict and Contradiction in Women's Writing on the Nigerian Civil War." *African Languages and Cultures* 4.1(1991): 29-42. Special issue on the Literature of War.

Cancel, Robert. "African-Language Literatures: Perspectives on Culture and Identity." Owomoyela 285-310.

Chinweizu; Onwuchekwa Jemie; and Ihechukwu Madubuike. *Toward the Decolonisation of African Literature: African Fiction and Poetry and Their Critics*. Enugu, Nigeria: Fourth Dimension, 1980.

Davies, Carole Boyce. "Introduction: Feminist Consciousness and African Literary Criticism." *Ngambika: Studies of Women in African Literature*. Ed. Carole Boyce Davies and Anne Adams Graves. Trenton, NJ: Africa World, 1986. 1-23.

江原由美子「ジェンダーの視点から見た近代国民国家と暴力」江原 297-366

---編『性・暴力・ネーション』フェミニズムの主張4　勁草書房 1998年

Emecheta, Buchi. *Destination Biafra*. 1982. Glasgow: Collins-Fontana, 1983.

---. *Head Above Water*. 1986. Heinemann African Writers Ser. Oxford: Heinemann, 1994.

---. *In the Ditch*. 1972. Heinemann African Writers Ser. Oxford: Heinemann, 1994.

---. *Second-Class Citizen*. 1974. Heinemann African Writers Ser. Oxford: Heinemann, 1994.

Enloe, Cynthia. *The Morning After: Sexual Politics at the End of the Cold War*. Berkeley: U of California P, 1993. 池田悦子訳『戦争の翌朝——ポスト冷戦時代をジェンダーで読む』緑風出版 1999年

Ezeigbo, T. Akachi. *Fact and Fiction in the Literature of the Nigerian Civil War*. Lagos, Nigeria: Unity, 1991.

---. "Vision and Revision: Flora Nwapa and the Fiction of War." *Emerging Perspectives on Flora*

Nwapa: Critical and Theoretical Essays. Ed. Marie Umeh. Trenton, NJ: Africa World, 1998. 477-95.

Frank, Katherine. "Women Without Men: The Feminist Novel in Africa." *African Literature Today* 15 (1991): 457-70.

Harneit - Sievers, Axel, Jones O. Ahazuem, and Sydney Emezue. *A Social History of the Nigerian Civil War: Perspectives from Below*. Studies in African History 17. Enugu, Nigeria: Jemesie; Hamburg, Germany: LIT Verlag, 1997.

Jones, Eldred. "Editorial." *African Literature Today* 13 (1983): vii-x.

加納実紀代「再考・フェミニズムと軍隊」『インパクション』115号（1999年）：106-20

Kerber, Linda. *No Constitutional Right to Be Ladies: Women and the Obligation of Citizenship*. New York: Hill, 1998. 宮地ひとみ訳「憲法は〈女らしさ〉を保障しない——市民としてのアメリカ女性」『同志社アメリカ研究』35号（1999年）：39 - 46（著作の5章に修正を加えた講演の翻訳）

金富子「朝鮮人『慰安婦』問題への視座——フェミニズムとナショナリズム」日本の戦争責任資料センター 193-202

McLuckie, Craig W. *Nigerian Civil War Literature: Seeking an 'Imagined Community.'* Studies in African Literature 3. Lewiston, NY: Edwin, 1990.

Meniru, Teresa E. *The Last Card*. Lagos, Nigeria: Macmillan Nigeria, 1987.

Moss, Joyce, and Lorraine Valestuk. *African Literature and Its Times: Profiles of Notable Literary Works and the Historical Events that Influenced Them*. Vol. 2 of *World Literature and Its Times*. Detroit: Gale, 2000.

牟田和恵「女性兵士問題とフェミニズム」『書斎の窓』489号（1999年）：36-9

中山道子「論点としての『女性と軍隊』——女性排除と共犯嫌悪の奇妙な結婚」江原 31-59

Ngugi Wa Thiong'o. *Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature*. Studies in African Literature. London: Currey, 1986.

日本の戦争責任資料センター編『シンポジウム——ナショナリズムと「慰安婦」問題』青木書店 1998年

Njoku, Rose. *Withstand the Storm: War Memories of a Housewife*. Ibadan, Nigeria:Heinemann, 1986.

Nwachukwu - Agbada, J. O. J. "Buchi Emecheta: Politics, War, and Feminism in *Destination Biafra*." Umeh 387-94.

Nwagbara, Augustine Uzoma. "Women and the Dialectic of War: Comparative Study of the Portrayal of Women in the Nigerian Civil War Fiction." *Men, Women and Violence: A Collection of Papers from CODESRIA Gender Institute 1997*. Ed. Felicia Oyakanmi. Gender Institute Ser. Dakar, Senegal: CODESRIA, 2000. 125-52.

Nwapa, Flora. *Never Again*. 1975. Trenton, NJ: Africa World, 1992.

Ofoegbu, Leslie Jean. *Blow the Fire*. Enugu, Nigeria: Tana, 1985.

Odege, Ode S. "Exile and the Female Imagination: The Nigerian Civil War, Western Ideology(Feminism), and the Poetry of Catherine Acholonu." *Neohelicon* 26.1 (1999): 125-34.

Ojo-Ade, Femi. "Women and the Nigerian Civil War: Buchi Emecheta and Flora Nwapa." *Etudes Germano-Africaines* 6 (1988): 75-86.

岡真理『記憶／物語』思考のフロンティア 岩波書店 2000年

---. 「私たちはなぜ、自ら名のることができるのか——植民地主義的権力関係についての覚え書き」日本の戦争責任資料センター 215-36

Okereke, Grace Eche. "The Nigerian Civil War and the Female Imagination in Buchi Emecheta's *Destination Biafra*." *Feminism in African Literature: Essays on Criticism*. Ed. Helen Chukwuma. Enugu, Nigeria: New Generation, 1994. 144-58.

Onwubiko, Pauline. *Running for Cover*. Owerri, Nigeria: Kay Bee Cee, 1988.

大池真知子 「アフリカ女性文学研究の発展と文献紹介」『ジェンダー研究』2号（1999年）113 - 68

---. 「海外と日本での現代アフリカ女性文学研究の動向」『日米女性ジャーナル』26号（1999年）98 - 118

Osuntokun, Akinjide. "Review of Literature on the Civil War." *The Civil War Years*. Ed. Tekena N. Tamuno, and Samson C. Ukapabi. Ibadan, Nigeria: Heinemann, 1989. 85-105. Vol. 6 of *Nigeria Since Independence: The First Twenty-Five Years*.

Owomoyela, Oyekan, ed. *A History of Twentieth-Century African Literatures*. Lincoln, NE: U of Nebraska P, 1993.

---. "The Question of Language in African Literatures." Owomoyela 347-68.

Oyeweso, Siyan. *The Post-Gowon Nigerian Accounts of the Civil War 1975 - 1990: A Primary Review*. Lagos, Nigeria: Africa Peace Research Institute, 1992.

Porter, Abioseh M. "They Were There, Too: Women and the Civil War(s) in *Destination Biafra*." Umeh 313-32.

Reardon, Betty. *Sexism and the War System*. New

York: Syracuse UP, 1985. 山下史訳『性差別主義と戦争システム』勁草書房1998年

Research in African Literatures. 23.1(1992). Special issue on question of language.

Research in African Literatures. 24.2(1993). Special issue on oral literature.

Research in African Literatures. 25.3(1994). Special issue on women as oral artists.

Research in African Literatures. 28.1(1997). Special issue on the oral-written interface.

佐藤文香 「アメリカの女性兵士をめぐる言説の分析――『G. I.ジェーン』から見えてくるもの」『女性学年報』19 (1998) : 1-14

Spivak, Gayatri Chakravorty. *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*. Cambridge: Harvard UP, 1999.

Stratton, Florence. "The Mother Africa Trope." Ch. 2 of *Contemporary African Literature and the Politics of Gender*. London and New York: Routledge, 1994.

田島正樹「フェミニズム政治のメタクリティーク」江原 61-91

Turshen, Meredeth. "Women's War Stories." *What Women Do in Wartime: Gender and Conflict in Africa*. Ed. Meredeth Turshen and Clotilde Twagiramariya. London and New York: Zed, 1998. 1-26.

上野千鶴子 「英霊になる権利を女にも？――ジェンダー平等の罠」『同志社アメリカ研究』35号 (1999年) : 47-57

---. 「ジェンダー史と歴史学の方法」日本の戦争責任資料センター 21-31

---. 「女性兵士の構築」江原 3-30

Umeh, Marie, ed. *Emerging Perspectives on Buchi Emecheta*. Trenton, NJ: Africa World, 1996.

---. "The Poetics of Thwarted Sensitivity." *Critical Theory and African Literature*. Ed. Ernest N. Emenyonu. Calabar Studies in African Literature 3. Ibadan, Nigeria: Heinemann Nigeria, 1987. 194-206.

Umelo, Rosina. *Felicia*. Pacesetters. London: Macmillan, 1978.

谷中寿子「戦争とジェンダー」『同志社アメリカ研究』 35号 (1999年) : 10-6

(おおいけ・まちこ 広島大学総合科学部講師)